

鳥取県青少年育成アドバイザー 協議会通信

鳥取県青少年育成アドバイザー通信42号
鳥取県青少年育成アドバイザー協議会
発行日 2005. 3. 15
編集 芳村恵子
〒680-0002 鳥取市浜坂東1-10-15

鳥取県青少年育成アドバイザー協議会研修会

日時 平成17年2月12日(土)
場所 羽合温泉 翠泉
出席者 山本邦彦 伊藤肇 清水成眞
新川裕二 田中寛一 井上廉女
西浦公子 森岡敏人 芳村恵子

雪の降りしきる中、久しぶりに仲間が集い、研修会が開催されました。

会長の挨拶そして検討事項の話し合いの後、事務局より用意された資料をもとにディスカッションが行なわれました。

文部科学省・警察庁・内閣府・厚生労働省などの報告書をもとに、現在の多くの問題をまとめた50余りの情報ファイルが準備されていました。

今時の状況として、ただぼんやりとした傾向は見ていたつもりでしたが、こうして統計として示されるとその重大性がありありと感じられるものが多くありました。

例えば、若年層の無業者(ニート)やフリーターの問題、性感染症クラミジアの激増、学力低下の現状、児童虐待など、ドキドキしながらその数字を追いました。

その他食生活の問題や日頃困っていることに対する相談など時間一杯話し合いました。

決して一人では考えられない問題の対処方法や、多くの新しい知識を得ることができました。こうして仲間のいることの素晴らしさを今日も感じさせて貰いました。

これからも、もっともっと多くの会員が集まってそれぞれの持つ力を出し合いお互いを高め合いたいと思いました。



発展途上の私たち

菊澤 慧昭

あの大きな戦争を体験されて、誰もが二十歳まで生きられたことに、まず感謝が出来た昭和二十年代から三十年代にかけての成人式は、どんなにか思い出に残る素晴らしいものであつただろう。不思議なことにテレビに流れてくる近年の荒れた成人式の報道を見ながら、そう思った。

愚連隊さながらの男の子たちはもとより、恐らく親から買って貰ったのであろう振り袖を台無しにしながら騒ぐ女の子たちの悲しい姿を見て、どうかこれからの長い人生を通して、二十歳の時に自分がした振る舞いを恥じ入る時が来てくれることを祈る思いである。



私たちが限られた人生を通して学ぶものは『人の振る舞い』である。決して二十歳が偉いのではなく、決して(法律上の)大人になることが偉いのではない。

真の大人の条件とは、自分自身が「未熟」であることをしっかりとわきまえて、自身の魂を成長させて、それぞれの立場で社会に貢献してゆくことを誓うことが成人式の意義であろう。

この誓いは求めても得ざる願いが多い故に、私たちは誰もが人生を苦しんではいけるけれど、だからこそ人間は生きている実感をかみしめることが出来るのであろう。人は、まさに『発展途上』を生きている。

未熟な我が身であっても、人にはやらねばならないことがあるのだ!

人は誰も、「求めても得ざる苦しみ」を背負って生きる生身の動物である。

「誰かの役に立ちたい・誰かのために尽くしたい」と願う心は、そんな『発展途上』の人としての美しい魂の表現方法であり、私たちが人としてこの世の中を立派に生きていることの証しである。

沢山の動物たちが暮らす、とても大きな森。この森はまるで砂漠の中のオアシスのように、美しい水を満々と湛えた湖を取り囲むように草花は生い茂り食料も豊富にあり、動物たちはこの自然の恵みを戴いて、みな幸せに暮らしていた。

ところがある日のこと、この平和な森に火事が起こる……。火は折からの強風にあおられ、瞬く間に燃え広がり、動物たちは火を消すどころか右往左往して逃げ回るより他なかった。

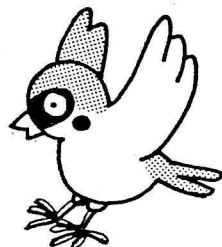
湖のほとりに避難して、なすすべもなく燃え盛る火を見つめるだけの動物たち。すべてが諦めに満ちていたその時、スズメほどの小さな鳥が、湖の水面に飛び込んで小さなクチバシ一杯に水を含み、再び天空に舞い上がり、たった一滴の僅かな水を炎の中に落としたのである。

何度も何度も、この無駄とも思える行為を繰り返す小鳥に、動物たちは皆嘲り笑ったのである。

けれども、それでもその鳥は止めることはなかった。そこにはその鳥自身の真実があったからである。『私は、こうしか生きられないんだ』消せる消せないではなく、誰に笑われようと馬鹿にされようと、その鳥の『仏心（ぶっしん）』はそうすることを望んでいたのである。小鳥の一滴に笑い、群れを成す多くの嘲笑に怯んではならないのだ。

文化・科学・技術の発展と進歩は、私たちの生活を豊かにするはずであった。しかしその発展の裏には、新たな犯罪や奇怪な病気を作り、人々の心は荒廃していった。そして近年の異常気象や地球の自然環境の変化は天変地異の予兆さえ考えられる中、自らの幸せを願う以上に他の人々の幸せを祈り、自分に出来ること、自分の分に応じた社会への働きかけ、そして家族や周りにいる人々への協力を惜しみなく行なう生き方が求められる。

この説話は、たとえどんな困難が待ち構えていても、我が為、世の為、人の為に、それぞれの環境で雄々しく生きるための私たちへの警鐘と最高の勇気を与える教えである。

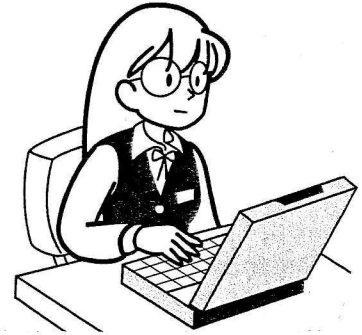


午前8時30分「お早う御座います」元気な声の挨拶が聞こえます。服を着替え、連絡帳を籠に入れ、教室ではコーヒーを飲んだりしながら賑やかなお喋りが始まりました。これはどこにでも有る、朝の学校の風景のようです。

でも少し違うのです。1時限は生活科の授業です。教科書は有りません。

指導員が作った教材で授業は進みます。分からないことは教えあったり、間違えた答えをしても決して笑われることはありません。授業時間も融通が利きます。難しい授業は短めに、相手が乗ってきたなら少し長めにします。

ここはどこでしょう？
県立倉吉高等技術専門校 総合実務科の朝の光景です。



ここでは知的障害者の方々が就労に向けて職業訓練を受けておられます。私はここが学校教育の原点のような気がします。

10余名の少人数を、数名の職員がお世話をしています。個性・特性を出来るだけ大切にします。無理はせず、納得ができるまで指導してゆくようにしています。

体力作りのマラソンも走る・歩くは自由です。我がまま放題と思われそうですが、そうではなく自立を促す手法と思っています。深入りはしませんが、困り事は何時でも相談出来ます。

訓練生達の仲が実に良いのです。喧嘩・口論のたぐいはありません。休日でも彼らは一緒に遊びに出るくらいです。

つまり、世間では知的障害者として、幾らかの差別的目で見られることもありましようが、ここではそれが全く無いので、実に居心地の良い場所なのです。

私は、人は優しく、暖かい気持ちに包まれることで、限りなく進歩していくことを実感しました。

間もなく訓練を終え、各自がそれぞれの道を一人で歩み出します。社会の冷たい風を受けながら、ここでの僅かな期間の楽しい思い出を一つの気持ちの支えとして生活して欲しいと願っています。



携帯でつながった関係

藤井 久美

「エッ!? やられた!!」

日曜日の早朝、引越しのトラックが来ているとの連絡を受けました。すぐに行ってみたのですがもう済んだ後で、そこにはトラックも彼女の姿もありませんでした。3年前から関わっている一人親家庭のことです。

彼女との関係は、二人の子どもの新入学にあたり、「就学援助を受けたい」との相談を受け、アパートに出掛けた時から始まりました。彼女は私の息子の小・中学校の時の同級生だということがわかったこともあり、いろいろなことを話し合ってきました。

上の子が2年生の時、ネグレストの疑いがあるということが発覚し、その頃から学校、児童相談所と連携を取り合ってきました。

結果的には、児童相談所の一時預かりを経て、昨年10月、施設への入所が決定されました。その間には、電気が止められたことでろくそくでの生活をしなければならない、またアパートの家賃も数ヶ月ためているということなどもありました。仕事も長続きせず、お金に困っていることも知っていました。度々県外に出掛けていることは知っていましたが、まさか引越しをしてしまうとは思っていませんでした。「まさか!？」という感じがしました。

私自身、頼ってきてくれていると“自信過剰”になっていたのでしょうか。周りの人に「こんなもんですよ」と言われましたが少々落ち込んでいました。ショックが大き過ぎました。

その日の昼過ぎ、彼女から携帯に電話がありました。正直、驚きました。彼女との関係は断ち切れたと思っていたのです。

彼女は黙って出て行ったことを詫び、そして「今後も連絡するから相談に乗って欲しい」と言ってきました。彼女の電話に救われた思いでした。その後は定期的に彼女から私の携帯へ連絡があります。

彼女は、子ども二人に虐待をしたということで、現在月に数回のカウンセリングを受けつつ、子どもと離れて県外で生活しています。子ども達も施設でカウンセリングを受けながら生活をしています。

彼女も普段は一人で二人の子どもの育てている一般的な母親です。でも、何かちょっとしたきっかけで虐待ということをしてしまいました。何度も彼女の言い分を聞き、何度も話し合ってきました。その結果、私も彼女がそうせずにいられなかったという気持ちがあったことが理解でき、そして彼女も話し合っていくうちに、自分のしていることへの認識が出てきたように思います。

いつの日か、親子がまた一緒に生活できることを願い、携帯でつながっている関係を大切にしていきたいと思っています。そして、最近の電話で、「会いたいですね」と言われた言葉を嬉しく受け止めています。



編集後記

啓蟄も過ぎ、久し振りに蟻を見て春を感じたと思ったら、またもや寒波到来で雪だるまマークが並びました。また、時期をずれてのインフルエンザも流行し、どうなっているのでしょうか。

それでも入学試験や卒業式と、例年通り3月の行事は行なわれ、嬉しさや悲しみの涙を流しつつも、みんな明日に向かって歩み出しています。

一人ひとりにエールを送りたいものです。

ところで今年度も、予定通り通信発行が出来ました。ご協力有り難うございました。